



ハイ！みなさんこんにちは！ ナースちゃんです。お元気ですか？今回も、ブレイクタイムで癒されて下さいね。
今回から、日々のなにげない出来事やみんなに伝えたい思いなどを書き込む日々雑感のコーナーも始まりました。
こころのつながりの場になればと思います。

日々雑感

***** 桜の木におそわったこと *****

病院西側の河原の桜並木。私達を楽しませてくれた、あのむせかえるような満開の桜の時期もおわりました。

葉桜前の茶色い花のがくだけが残った桜の木を見て、私は、“キタナイ景色だなあ、早くこの時期がおわればいいのに”とっていました。でも、ある日の朝の通勤時、その桜の木を見てこう思うようになりました。

“あの満開の美しい桜の花を咲かせるためには、この時期はなくてはならない大切な時期なのだ”と。

人の生き方も同じ、挫折や失敗、思い出したくないような時期、自分の中から消したいと思うこともあるでしょう。でも、その経験があったからこそ今の自分がある。その時期は、その人が成長するには、なくてはならないもの。

そう思うと桜の花だけを春先追いかけて見に行くことのむなしさをも感じてきました。

でも、結局桜の木はきれいとかキタナイとかどんな風に見られようが関係なく、どんな時期も精一杯生きている。そして、その姿がとても美しいのだと感じ、自分の小ささを痛感している今日この頃です。

あんず



すっかり葉桜になった荒川土手の桜



読書は人の糧となり、その人を成長させてくれます。
読書っていいものですね。
さあ！次は、お待ちかねの**お気に入りの一冊**のコーナーです。

お気に入りの一冊

三浦 綾子 著 「母」

今年も、「母の日」がやって来ました。

みなさんは、反戦小説「蟹工船」の著者、小林多喜二を、ご存知でしょうか。これは、その小林多喜二の母、セキの大らかに見守り、人を信じ、愛し、懸命に生き抜いた、波乱に富んだ一生を描いた、長編小説です。

手段を選ばない人権抑圧と徹底的な思想統制によって、国民を戦争へと駆り立てた、権力犯罪の犠牲となった人々の悲劇と不条理を背景に、決して戦闘的ではなかった、どこまでも家族を愛し、信頼し、素朴で働き者、そんな母の言葉。

そして、そんな母セキと息子多喜二の会話が、言論の自由が許されていることに何の疑問もいだかない私達に、とても大切なことを訴えてくる一冊です。

翌日がお休みの日に一気に読むことを、おすすめします。

文



「母」 三浦綾子 著（角川文庫）